



# 抱えきれない夢

渡辺プロ・グループ四〇年史

財団法人 渡辺音楽文化フォーラム

# 抱えきれない夢

渡辺プロ・グループ四〇年史

財団法人 渡辺音楽文化フォーラム



# 抱えきれない夢

渡辺プロ・グループ40年史



# 抱えきれない夢

渡辺プロ・グループ四〇年史

財団法人 渡辺音楽文化フォーラム

## 発刊によせて

渡邊美佐

亡き夫・渡邊晋と私が二人三脚で渡辺プロダクションを興してから、四〇年が経ちました。その間、徐々に事業が拡がり、今、渡辺プロダクションを中心に二三の主な企業と一財団を含むグループを形づくっています。

創業四〇年と時代の大きな曲がり角とが重なって、社の内外から、社業の足跡をふり返り記録に残してはという声が起こり、ひとまずここで、「社史」をまとめてみるようになりました。

社績の柱は渡辺プロダクションが成し遂げてきたものであり、記述の大半もそれに費やされていますが、近年の諸活動は、すべてグループ企業相互の連繋のもとに展開されています。上梓にあたり、「渡辺プロ・グループ四〇年史」と名付けたゆえんです。

戦後の社会的混迷がまた尾を引く時期に、渡邊晋と私が試みたひそかな夢の冒険が、新分野の企業として長らえ、その後の大衆音楽やショー・ビジネスの発展に少しでも貢献し得たとすれば、それははからずも道を拓くことになった私共の功というよりも、私共を支え力づけてくださった

たたくさんの皆さまのご厚情の賜です。

今、私の心を満たしているのは、ことばに表わしきれない皆さまへの感謝の気持ちです。人生の幸せは、人と人との心の結びつきによるこびを見出せることだと、編纂の作業を通じて、私は改めて深く学んだように思います。

「社史」が、渡邊晋の二三回忌に合わせて上梓できたことにも、私は格別の感慨を覚えます。晋は、亡くなる前に「社史」の整備を思い立ち、社内に指示していました。

プロダクションの創意と努力で見事にタレントたちを育てても、華やかなスターの足跡だけが話題にされ記録されて、それを生み出した仕組みや方法のデータは残らない。一途に働き、成果を競うほかは、残され蓄積されることのないプロダクション業務の在り方に、晩年の晋は懸念を持ったのだと思います。芸能プロダクションを近代企業に育て、社会に認知されることに情熱を傾けた晋の、業界の将来をおもう当然の目配りであったように思います。プロダクションの企業史と呼べる記録は、日本にも世界にもありません。

今、晋の志を継いで、まがりなりにも、礎石となる試みが果たせたことが、私にはうれしく思われます。不備や内輪に片寄る点もあり、力不足のご批判も受けるでしょう。しかし、それも次のステップへの糧として受けとめたいと思います。

「社史」をまとめ終わって実感するのは、記憶を呼びさまし位置づけるということが、こんなにもエネルギーを使い疲れるものかということですが、同時に、思い出の山や谷に彩られた自分の一筋の道への展望が、今の私に思いがけない充実と意欲とを与えてくれることも知りました。

取材に快く応じ、忘却のもやの中から折々の道筋を照らし出す役目を果たしてくださった、百名を超える社外の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

また、ジグソーパズルに向かうような根気仕事に徹して、広く多岐に亘る社業の全体像をまとめてくださった執筆の河端茂氏、出版について行き届いた助言をいただいた木滑良久、石川次郎両氏、装丁・デザインで本書に華を添えてくださった和田誠氏にも、深く謝意を表します。

「社史」の作業の間にも、お世話になった方、親しい方、身近な方、取材に応じてくださった方々の中から、悲しい見送りが相つぎました。時の流れ、時代の移ろいを感じます。

本書を、亡き方々への哀惜のしるしとしたいと思います。

一九九九年一月

# 目次

発刊によせて……………渡邊美佐

プロローグ……………1

第一章 渡辺プロダクションの誕生……………7

「戦後」の青春 9

戦後ジャズの推移 13

ジャズ・ブームの時代 16

戦後ジャズ・ビジネスから出たプロダクション 20

渡邊晋と曲直瀬美佐 23

渡辺プロダクション発足 30

逆風のなかを 35

第二章 潮流を捉える……………41

ジャズとポピュラー 43

有限会社渡辺プロダクション 46

C & Wからロックン・ロールへ 50

日劇「ウエスタン・カーニバル」	53
ロカビリー・ブームの渦中で	61
最初の発掘	65
新しいマネージャー像	69
トータル・マネージメント	72

### 第三章

#### ニュー・イメージ

77

同時進行型経営	79
深夜のミーティング	85
レコード・ビジネスとの絆	90
プロダクションの合理的経営	94
企業イメージの形成	97
組織化への布石	101
社内体制の動向	104

### 第四章

#### 構想と展開

109

「シャボン玉」の意義	111
英才教育と連呼方式	115
美佐・イン・ニューヨーク	119
タレントの信頼感	123

原盤ビジネスの発想と導入	127
渡辺音楽出版の発足	131
映画プロデューサーとして	139
渡辺プロ・グループの骨格	143

### 第五章

#### 巨大な転換期

149

精強集団への道	151
宿願の海外進出	154
大阪万国博覧会	159
地方の営業活動	171
ミュージック・ビジネスの転換期	176
アポロン音楽工業	181
エンターテインメントの情報化	187
ワーナー・パイオニア株式会社	192
グループ化の進展とコンピュータ化	197

### 第六章

#### 渡辺プロ歳時記

203

新年	206
春	214
夏	217

第七章 新たな脱皮へ……………239

- 時代転換の予感 241
- マスコミ報道の曲線 246
- 晋の公的活動 254
- 「月曜戦争」考 260
- グループ像の拡大と立体化 268
- レコードとテープ 274
- 渡辺音楽文化フォーラム 278
- 変動期へのジャンプ台 284
- 危機のなかの組織改革 290

第八章 哀しみのとき……………295

- 宿病の進行 297
- 「ラスト・タイクーン」 300
- 藍綬褒章の内意をめぐって 304
- 晋社長、逝く 308
- 死後の栄光 312

事業継続の決意 319

第九章 試練を超えて……………325

- 新役員人事とタレント政策 327
- 組織化の方向と系列化の展開 330
- 渡辺音楽出版と著作権事情 341
- 美佐の公的活動 353
- 愉しみと交遊と 365
- 伝統と新生 373

エピソード……………379

補述とあとがき……………396

- 一 敬称は略させていただきます。
- 二 業界関係者ならびに弊社関係者は、氏名のあとにカッコで現職を示しています。ただし、渡邊晋・美佐は兼職が多いため、とくに表示しません。
- 三 年代表示は原則として西暦と元号を併記しましたが、その近くでは煩を避け、主に西暦のみの表示としました。
- 四 本文記述中、楽曲名、書名、演題などは二重カッコで表記してあります。
- 五 記述は常用漢字、現代かなづかいに準拠しましたが、個人名は正字、引用は原則として原文のままです。
- 六 目次構成は時代区分に従っていますが、一括して扱うようなテーマは、前後にずれる場合もあります。

## プロローグ



歴史は、すでに完結してしまった物語の記憶などではなく、ながい歳月をくぐり抜けて  
なお、人びとの心の底に息づいている感情のうねりなのではないだろうか。

「戦後五〇年」がしきりに語られた一九九五（平成七）年の翌年、こんどは「戦後ジャ  
ズ」の五〇年間にちなむ数々の催しが行われた。

- 一〇月一五日 ジョージ川口五〇周年記念リサイタル（NHKホール）
- 一〇月一八日 与田輝雄Swinging 50 Years（東京会館）
- 一〇月二三日 穂吉敏子「ジャズと生きる」出版記念会（ホテル・パシフィック）
- 十一月二九日 松本英彦五〇周年記念リサイタル（サントリー・ホール）

このリストに、一〇月九日の原信夫とシャープス&フラッツ結成四五周年リサイタル  
（オーチャード・ホール）も加えるべきだろうし、逆にまた、自らの拠点としているジャ  
ズ・スポットで、こぢんまりとした集まりを持ったジャズメンたちの心意気も忘れられ  
はなるまい。

そして、これら一連のイベントの先駆となったのが、九四年一〇月一〇日に東京会館で  
行われた「米軍クラブ仲間の同窓会」であった。終戦とともに日本各地に進駐してきた米  
軍キャンプには、必ず慰安用の施設が置かれた。それがクラブであり、そこにエンターテ  
インメントを提供するショー・ビジネスが発生した。

同窓会の発起人代表は永島達司、渡邊美佐、石井好子。永島はクラブの支配人であり、  
美佐は出演するバンドのマネージャーであり、石井は歌手として舞台に立つ人だった。キ  
ャンプ・エンターテインメントの異なる局面を代表する三人であった。

席上、美佐はつぎのような挨拶をした。  
「こんなに大勢、同じ時代の同じ思いを持つ方たちがお集まりになって、私は胸がいっ  
ぱいです。戦後から今日まで、限らない希望を抱いて日々を送ってきました。つらいこと、



米軍クラブ仲間の同窓会記念写真

楽しいこと、いろいろありましたが、そのスタートが当時の米軍キャンプでした」。

朝鮮戦争の終息を境に、米軍は逐次その規模を縮小し、基地内のエンターテインメント・ビジネスは、対象を日本そのものに拡大してゆく。美佐の挨拶は、そのことを踏まえていた。

しかし、彼らがキャンプで学んだのはビジネスだけではなかった。クラブを一步出ると、そこは峻烈な規律が支配する軍隊社会であった。そこに出入りした日本人たちは、軍隊というフレームを通じて、日米の文化的差異を肌で実感する。旧日本軍には想像できないような自由と明るさと豊かさ、生活をエンジョイする積極さ。

キャンプ・エンターテインメントの主流はジャズだったが、そこで日本人ミュージシャンたちは、楽譜を基準にした「うまい、へた」より、「いかに自分を表現するか」が、ジャズの生命なのだと教えられた。穂（秋）吉敏子の『ジャズと生きる』（岩波新書）は、そこにテーマを絞り込んだ自伝である。日本とアメリカに跨る真摯な生きざまは、キャンプを卒業した同窓生たちにも共通する姿勢だった。

前記した与田輝雄の会は、ブッフフェ・ディナー・ショーのスタイルで行われた。会費三万円という金額にもかかわらず、五〇〇人を超える客が集まった。美佐はミュージシャンや歌手が固まっているテーブルを見つけ、レイモンド・コンデと志摩夕紀夫の間に座った。思い出話で盛り上がった頃、往年の名司会者らしい物腰で志摩がひろい会場に呼びかけた。

「いま、ここにいるほとんどの人たちに月給を払った人がおられます。渡邊美佐さんです」

さかんな喚声と拍手が上がった。近くの人は微笑みかけてくる。

渡邊晋と美佐は、渡辺プロダクションを発足させると同時に、所属のミュージシャンに

対する月給制度を実施した。「生活が安定してこそプレーに専念できる」という信条からはじめたものである。ジャズ・ブームはすでにピークを超え、きびしい現実のなかで理想の旗を掲げたのだった。夫妻はやりくりに苦しんだ。

あるとき、晋は疲れ切った表情でバンドの控室に戻ってくると、洋服のあちこちのポケットからくしゃくしゃの札を取り出した。それをテーブルの中央にかき集めると、

「さあ、よかったら持っていけ」

「よかったら、と言ったって、これは月給なんだからもらいますよ」

「うん、さつさと持っていけ。ドロボウ！」

あの月給は、きつと晋さんがポーカーで稼ぎ出したものだろうと、バンドマンは推量したという。

ミッキー・カーチスはある日、美佐から仰天するような電話を受けた。

「これから、ちよつと金庫破りをしてよ」

「え？ いま、なんて言った」

その日、美佐はあるミュージシャンにバンス（前貸し）をする約束になっていた。オフイスにつくと、経理を担当している女性事務員がいない。所用で今日は帰ってこない、という。あいにく、金庫を開ける番号はその人しか知らない。美佐は咄嗟にミッキーを思い出した。当時、金庫破りのリアルな手口を描いた洋画が公開され、指先の器用なミッキーはいたく刺激を受けた。簡単な金庫を開錠しては悦に入っていたのだ。彼は渡辺プロの金庫破りに成功し、美佐は約束どおり、ミュージシャンにバンスしてあげた。

志摩のひと言が大受けに受けたのは、渡辺プロの月給制度にまつわる、このような数々のエピソードを、当夜の出席者たちの多くが直接に、あるいは間接に知っていたからである。青春の無鉄砲さに満ちた若い頃の記憶が呼び起こされた。



与田輝雄50Yearsの会

「よりよいジャズを聴かせるために」。この理想のもとにはじまった渡辺プロの月給制度と、そのことによる渡辺プロの苦しみは、当時のミュージシャンたちにとって、決して他人ごとではなかった。

好きなジャズをつづけて、かつてキャンプで見聞したような明るさと豊かさを、自分たちのものにしたという願いは、未来にみる共通の灯火であった。

「これは月給だもん」と憎まれ口を叩きながら、皺くちやの札をポケットにしまったミュージシャンたちも、夫妻の苦勞は良く知っていた。雇う立場と雇われる立場という意識はなかった。キャンプのなかで見つけた希望を、現実のものとするために闘っている同志たちだった。

「楽しくなければショー・ビジネスじゃない」と、美佐は口癖のように言う。ミュージシャンたちのあの憎まれ口も、苦境を楽しみに変えようとする彼らなりの思いやりから出たものだったろう。夫妻を中心にした仲間たちは、苦しいときこそ冗談を飛ばし、笑顔を浮かべていた。

その日々からほぼ半世紀を経ても、この仲間意識は変わることがない。日常の生活では忘却しているかもしれないけれど、顔を合わせると甦ってくる熱い思いがある。まだまだやるべきことがあるのだと、気持ちが高ぶって立ってくる。「これこそが歴史の重みだ」と、美佐は感じた。

戦後五二年のなかに日本の戦後ジャズ五一年があり、その五一年のなかに渡辺プロ四〇年の歴史がある。そして、渡辺プロ設立以前に、渡邊晋と曲直瀬美佐は、すでにジャズ・シーンのなかで活動していた。

本史も、終戦の日に立ち戻ってスタートしなければならない。



米軍クラブ仲間の同窓会で